
gun and violence

歩笠浜砂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

gun and violence

【Nコード】

N7915Q

【作者名】

歩笠浜砂

【あらすじ】

荒くれ共の集う場にて、男は信念と生きざまを見る。

#1（前書き）

あたたと長く、正直ダメかなと思ったけど頑張りました。

自分の生きてきた世界は万人から見たら、一体どのように見えるだろう。俺の場合、不満だらけだと思っている。いや、不満じゃないむしろ、つまらないといった方がもしかしたら、正解なのかもしれない。何故、つまらないと見えてしまった？毎日、友人と楽しくワイワイとはしゃぎ、楽しいゲームもある。いつでも飲める居酒屋だつてある。他にも、楽しいことなんて数えきれない。それで事足りるはず。しかし、まだ足りない。何かが俺の世界を満たしてない。そんな事を考えながら、杉田正哉はいつも通りに会社に行くのだった。会社の通勤にはバス、電車の両方を使い、約1時間半の押しくら饅頭状態（特に電車）から解放され、都心の数多くあるビル群の一つに俺の会社がある。会社名『株式会社綱川重工』創立は随分昔だが、そんな俺にさらさら関係ないな。一体どういう会社か。しかしながら、俺は入社1年目なのに部署の名前を覚えてない。というより、覚えるつもりはない。うる覚えでいいと思う。因みに俺の部署は、資材部という。どういう内容は、割愛ということどうかひとつ。それに、内容は違えども入社1年目のやることは大抵決まっている。上司に頭を下げ、上司のご機嫌伺い。仕事が出来なければ尻を引つ張ったたれる。帰りに居酒屋に寄って、再び上司のご機嫌伺い。軽くこのくらいか。自分もそんな立場に立ってみせると意気込んでみたが、なんか馬鹿らしいと思った。

そう、これが俺の生きて行く世界。しかしながら、なんか変えてみたいとは思わない。そう思っていた。ある日、上司に海外主張に行く事になり狭く、息苦しいさがなくなり、気分一新。俺は海外で頑張ると意気込んだ。

以上、長たらしいプロローグはこれでおしまい。しかし、これはした方がいいと思う。俺が今まで何してきたか分かっただろ。今から話す、壮絶な物語。俺の世界を満たしてなかった何かを教えてくれ

た人たちの物語。

「そう、俺は偶然にも出会ってしまった。そう、彼女とー

パン！俺は突然聞こえた音で、目が覚めた。狭苦しい部屋で、おまけに部屋は蒸し風呂みたいに暑く、やっと寝つけた矢先だった。その音は絶え間なく聞こえてる。

「この音、近いな。なんだろう？」そう言って、外を見る。しかし、ここからでは見えない。

「仕方ない、外行るか。ついでに、外で涼しい風でも浴びるか。」

部屋を出て行き、階段を二回程降りたその時だった。目の前に拳が見えた。避けようと思った瞬間に殴られた。俺は大きく後ろに転げ落ち、尻餅をついた。

「痛い、何すんだ！」そう、大声を張り上げ、殴った人に言った。

「悪いな、だがお前が悪い。」

「ハア？いや、お前が悪いに決まってるだろ！」

「いや、お前だ。よくチャカの一つも持たずに、外にきたな。」

「何言ってるんだ？とゆうより、状況を」確認したいと言おうとした瞬間、銃を突きつけられた。その銃は、偽物にはない重厚さと、その銃の放つオーラを感じた。これ、偽物だよな？そう思い、俺は銃を突き刺す女の人に確認した。

「あの、これ偽物？」そう言って、銃を指差す。

「偽物なんか、持ち歩くか。」そんな口喧嘩をしてる内に、向こう側から四人いや、五人やって来た。そんな五人を見た俺は、いかにもチンプラだなと感じた。俺は、何かの映画撮影に巻き込まれたのかと考えた。しかし、その考えは一瞬で終わった。楽観的にしたかった。まさか、銃をこちらに向け、発砲してきた。

「チツ、いつまで追ってくるんだ。」女の人はずっと、うんざりした感じに言った。女の方は、俺の服の裾を引っ張り、逃げるぞと言った。ああ、こういう展開は、まさしくマンガやらアニメやらにあった、嫌な展開だ。

「おい、俺を巻き込むな！」俺の言葉を聞いてもなお、裾を引っ張

り逃げた。

それから随分と走った。俺たちは空き家を見つけ、そこに隠れることにした。俺は、息を整えて、女の人にありっただけの文句をぶつけた。

「おい、あんた。説明してくれ。どうして、俺まで巻き込まれないといけない？」

「助けただけだ。あのままだったら、海の藻屑だな。」

俺は、こんなに焦ってるのに、女の方はさも愉快に笑っていた。

「さて、逃げるのにも飽きた。おい、日本人。そこでじっとしてろ。」

「

俺はそう言われた。ちよつと待て、こいつもしかして・・・

「つて、あんた何しに行く？」

「はあ？何寝ぼけてる？決まってるんだろ。狩りに行くんだよ。」
すると、近くで罵声が聞こえてきた。さっきの連中か？

「さて、日本人。これ終わったら、一杯やろうぜ。」

女の方が外に出て、俺は言われた通りにじっとした。しかし、いくらなんでも、一人で果たして平気なのか？

俺はそこに居てはいけないと思い、外に出ていた。そして、それを目の当たりにした。そこで行われていることを信じるには幾分、時間を要した。相手は五人だ。女一人では無事では済まない、はず。

しかし、その考えは直ぐに間違えた。むしろ、男達が苦戦してる。・・・どうなってる？もしかして、本当に、一人でなんとかなってる？

女の人も男達も、どちらも銃をぶっぱなしてる。だが、女の方は物陰を利用して、正確に、男達の肩やら足やらを撃ってる。男達は、それで翻弄され瞬く間に戦闘不能になる。

「かつ、話なんねえ。」

女の方は、なんとも余裕な顔でそう言った。俺は直ぐに女の方の側に行った。それに気付き、顔をこっちに向けた。

「よう、その様子だと、そっちはなんともなかったようだな。」

「ちよつと、もしかして殺ったのか？」

俺は男達の方を見て、言った。しかし、何が面白いのか、女の方はゲラゲラ笑った。

「悪い、なんとも馬鹿馬鹿しくてな。そんな訳ないだろ。こんな小物、殺る価値ねえよ。」

「そんな小物に追われたお前も、滑稽だ。」

「ぎやはは、そうだな。全く、笑える話だ。」

女の人が、突然俺のネクタイを引っ張り、顔を近づけた。うわ、すげえ可愛い。意味もなく、ドキドキする。恐らく、二十歳そこそこじゃないか。

「な、何かな？」

俺は、自分でもぎこちないと分かるくらいに言った。女の方は、ごくモデルか女優みたいな笑顔で、俺にこう言った。

「言っただろ。これが終わったら、一杯やろうてな。」

それから、俺たち二人は近場の酒場に行った。

#1（後書き）

できましたら、感想をお願いします。次回は出来次第に発表します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7915q/>

gun and violence

2011年10月8日15時28分発行